



**共同作業で管理徹底**

比嘉さんはサトウキビ3.5畝、パツシヨンフルーツとドラゴンフルーツをハウスで計約13畝栽培する。同村サトウキビ生産組合の組合長など地元のリリーターを務める。

高齢農家は手作業で労力に見合った面積を維持しており、同村の1戸当たりの平均収穫面積は55㎡と小さく圃場が点在する。収益向上へ農地を集約した規模拡大は容易でない。このため注力するのが単収増と機械の共同利用と共同作業だ。

単収向上の基本は土づくり。堆肥は4～5年に一度、10㎡当り20ト投入。毎年土壌診断を行い、土壌成分に応じて単肥で土の状態を最適に保つ。その上で収量に直結する欠株がないよう補植を推進し、植え付けから、株出し管理、培土、害虫駆除など、収穫に至るまで機械化して地域の仲間10名と機械の共同利用や共同作業に取組んでいる。

**地域経済下支えに邁進**

仲間との機械の共同利用は作業性が高まり効率のいい機械化作業体系ができています。また高齢者や兼業農家の支援にも取り組んでいます。

台風常襲地帯の沖縄県のサトウキビは県内の7割の農家が栽培する。県内で糖業を中心に関連産業で雇用を維持するなど地域経済を下支えする重要な作物だ。サトウキビなしで沖縄の経済は成り立たない。機械の共同利用や共同作業でコストを抑え、多収量・高品質生産で経営を安定する。「そのことが地域を守ることになる」と、そんな比嘉さんたちの強い思いが沖縄のサトウキビ生産を支えている。

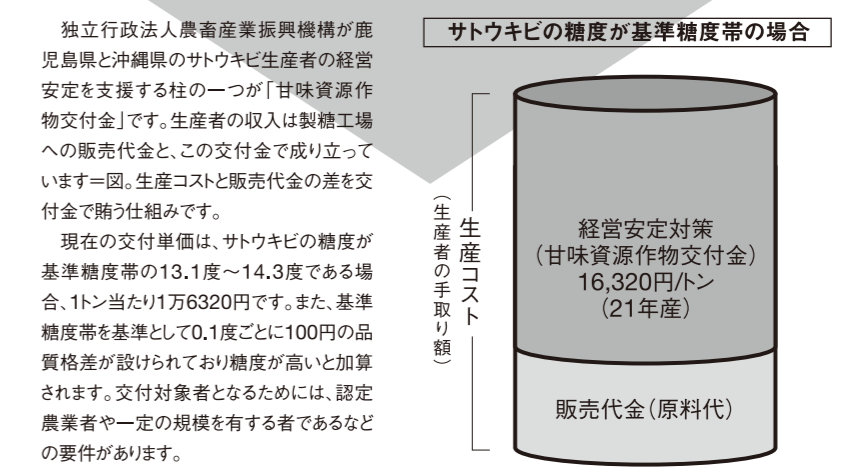
**機械の共同利用で地域社会に貢献**

沖縄県の本島北部・恩納村でサトウキビと果樹の複合経営に取り組む比嘉豊林（ほうりん）さん（66）。小規模で高齢の農家やサラリーマン農家が混在する地域で経営の安定化へ効率的な生産を目指し、まともな役割を担う。原動力は「サトウキビづくりは地域社会づくり人づくり」との熱い思いだ。

仲間同士であつても不満無く公平に行うのはなかなか難しく、月1回開く地域の仲間との寄合は大事な意思疎通の場。20年産の収量が前年を1.5ト近く上回ったのも天候に恵まれただけでなく、地域一体的に共同作業で肥培管理作業を進めた成果だ。

さらに販売代金では生産コストを賄うことができないサトウキビについては独立行政法人農畜産業振興機構の「甘味資源作物交付金」が経営の安定を支援している。比嘉さんは交付金と販売代金を合わせて現状の1ト当たり2万円を超えて収入水準だが、品質に応じて加算がある。「良い物を作れば収入は上がるのが励み。交付金のおかげで経営が安定するからこそ、地域のための組織活動に傾注できる」と語る。

**サトウキビの甘味資源作物交付金について（21年産）**



お問い合わせ先  
 鹿兒島事務所 Tel.099-226-4731  
 那覇事務所 Tel.098-866-1033  
 特産業務部砂糖原料課 Tel.03-3583-8960

詳しくは、当機構のホームページをご覧ください。お気軽にお問い合わせください。  
 ホームページ <http://www.alic.go.jp> alic 独立行政法人 農畜産業振興機構